

# 「鍼灸・漢方治療の生理学」

昭和大学医学部生理学講座生体制御学部門

教授 砂川 正隆

今回の講演では、西洋医学的治療と東洋医学的治療（漢方薬治療、鍼治療）とを比較し、作用機序の違いから、「西洋医学ではできないが、東洋医学ではできること」を整理し、そこから新たな治療法の可能性を考えていきたいと思えます。

痛みに対して、西洋医学の薬物療法では、非ステロイド性抗炎症薬（NSAIDs）、アセトアミノフェン、カルシウムチャンネル $\alpha 2\delta$ 遮断薬（リリカ、プレガバリン）、セロトニン・ノルアドレナリン再取り込み阻害薬（SNRI；デュロキセチン）、ワクシニアウイルス接種家兎炎症皮膚抽出液（ノイロトロピン）、オピオイド、トラムセツト配合錠などが、病態に応じて用いられています。しかし、薬が奏効しないこと、また副作用で服用できないことは多々あります。基礎研究では、痛みが慢性化するしくみがどんどん明らかにされてきていますが、それに対する治療が追いついていないのが現状です。効果的で安全な薬の開発は容易いものではなく、基礎研究で見つかった薬物が医薬品として世に出る確率は3万分の1ともいわれています。その打開策の1つとして、「既存薬再開発（drug repositioning）」が行われるようになりました。これまで使用されてきた既承認薬を見直し、別の疾患の治療用に再開発・適応させようとする方法で、病気の原因が分かれば、そこに作用する薬を既存薬の中から探して活用します。

東洋医学的治療は、長い歴史の中で安全性は保障されており、効果のないものは淘汰され、効くと分かっているものだけが今も使用されています。近年、漢方薬治療や鍼治療の作用機序の解明が進んできており、病気の原因にマッチする作用機序を有する治療法を、東洋医学的治療の中から選択する「治療法再開発（therapeutic repositioning）」も進んでいくのではないかと期待しています。

漢方薬では、抑肝散や牛車腎気丸などの鎮痛作用の基礎研究が精力的に行われており、現在使用されている鎮痛薬にはない作用機序を有することも明らかになってきました。鍼の鎮痛作用についても同様です。これらの治療法を疼痛治療に応用することは今すぐできますし、将来的には、必要とされる薬理作用を有する成分を同定・抽出することで、より効果の高い、新規の医薬品の開発につながる可能性も有しています。

本講演では、疼痛の発現機序のおさらいと、またそこに西洋薬、漢方薬や鍼治療がどのように作用するのか、そこから将来、どのような「治療法再開発」ができそうか、お話しいたします。